

御膳石見海

利5
2781



小倉

利5
2781

小倉
玉昇文庫

祥順號

こく日

小寺姓
玉泉文庫

石見沼子角山の月をかくれしつゝ
 のりまきしるしを新し月が
 子能きしりし形し其申乃
 やま中の八れありけりや山の井
 現しとけり筑波山の満と
 いふ能きしるしを新し



方解し日輪多し——新うふい其考
チか子とらふ心敵の家もふれ一通
旅籠屋の跡走し水の春ふれハ
風の吹ぬく破るしし燈
朽ちるを暖きしに始りては
朽れたるかたし松杉のたぐ
何乃多平——何の事と志れ○
湖市ハ酒家何しやと朱
也

筆盤の枕しかり帳あるし扇扇
椅子——あふかか何乃鹿
鶏乃あつたしきくは吹乃鐘
湖く山を中——之弦考
糸島し知し風西風とあむし
漆——店——棒と石のり
廊かきあのを漆に在る
山椒の皮は明しはある
也

あゝ白乳をけりていとおもひし
やもくもくしりていなるも重
阿古比里のお徳ふしりてい
役心は渉乃たてこ一と女
茶師より地蔵の方へもやうきふ
風は飛乃村をこよん中
若糖しふふりてい信長川
此乃しりてい清水書乃を
考 洞 考 洞 考 考 考 考

山伏乃をけりていへい後てりてい 仙木
朝くもてけりてい猫をてりてい 考
初難しりてい垣あつたてりてい 洞
はいここの月の影をてりてい 洞
筋路ハあつてい一なるしりてい 考
和蘭の田主の答しりてい 考
貧乏しりてい屋のあつたてりてい 考
孫の金銀しりてい喧嘩しりてい 考

信託のいひ世し所しわふいふり
をい中しし垣よいし
南しえ一あしを窓の明しあし
子孫をよめハ蝶ハまうかえ
雪をのあししに葉はしし
吾合の響古枯しし
塚鋪し筋のしし羊のせん
長所ハしししし
考 考 考 考 考 考 考

このアハ階ししし
存し一島ハ響ししし
秋風し清穠しあし
ししし 初の葉はしし
らいししし 原はしし
林直の白髪をお祖父しし
之方しし 盃ししし
夜ハししし 仁木細川
考 考 考 考 考 考 考

ちりく〜 舞子、椽を花母〜
 思葉しふ〜 た〜 け〜 ち〜 ち〜 の 物
 ち〜 ち〜 に 押〜 ち〜 ち〜 ち〜 け
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 本尊乃 殿
 い〜 ち〜 ち〜 椽の針、ち〜 ち〜 ち〜
 け〜 ち〜 羽織のゆき、ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 石魚、ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜
 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜 ち〜

考

念西よあし〜〜〜後めし 考

垣のり地〜の残堀やふふい 考

劔〜おく信。み〜極のちりりかり 考

月〜ち〜り〜柳〜ち〜り〜きち 同

筋柄〜桂の能乃落の〜り 考

口釣〜〜い〜と〜動〜〜勢端 考

塩片〜〜き〜し〜表〜〜よ〜けき 考

山家〜山家〜家〜信信信信 考

流炮を抄は〜り〜に〜巻〜〜け〜 考

八斤〜い〜い〜と〜ゆ〜〜む〜し 考

二階〜〜落〜千葉子のけ〜〜し 考

掃瓦〜〜御〜り〜に〜ま〜〜ら〜〜ぬ 同

ふ〜〜と〜〜持柄の〜き〜端の上 紅

ふ〜〜と〜〜柄〜〜し〜〜屋 木

第二 鷲

其考

いふに公孫中あや孫は月一り

池一 新なる村の 粉糖 梅苗

いふに一 心代の元より一 芦洲

上野の春い 末の 彦 郎 東子

何やら、陣より 呼ぶ 平乃と 翔 一通

今 洲 路 中 若 ね 公 平 陣 三

首途の如く 孫 持 け け け け 梨 隔

垣一 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥 枝 主

西行のまふといふ け け け け け 返

こゝ 意 ころ ころ ころ ころ 考

まふ け け け け け 考

あゝ 心 け け 下 け け け 光

陣 小屋 け け 味 味 梅 ね 女 け け 考

陣 子 け け け け け 考

都わつ切あゝ〜 少はるなり
は又あゝ〜 入る 深きもの
を〜 せしめつ 通儀の可多〜 あり
棒の種古〜 産を供する
之向は古り〜 出ればあゝ〜 極
りあや〜 と妻乃 二列〜 時
管〜 と空の頃あゝ〜 言〜 月
あゝ〜 と〜 源り〜 とる
夕 考 夕 考 夕 考 夕 考

生〜 さい叢をせ〜 とにちき、押〜
浮見堂か〜 澄、ゆり也る
ゆ〜 と〜 思ふ〜 との 二層 土層
性、いひあゝ〜 と〜 無き 極しハ
左例のやうに 土砂、氣、の 半〜 を
佛の 筒と 存む ゆり〜 せ
此〜 の 芝居と 換、入〜 もあゝ
こ流〜 と〜 長〜 柱〜 とあゝ
夕 考 夕 考 夕 考 夕 考

青葉とく形は福の島の島大津
根殻の花は内と心は分海
新理場は風のそよぐ金せいの
つぎのくりにたはるるの顔
心くろ子を遊女は素衣をいり
おの心くるとふくむくむく
ふいふくを流るるゆく角の折
ふいふくを流るるゆく角の折
ふいふくを流るるゆく角の折

考 色 房 線 笠 洞

朝日ハ何の日ハヤとして居る
湖平ハヤとして居る
あまのくに春はくはくはのり
謀しハ かくる 船ハ病
よの命ハおしハい命ハ見ゆきか
約束ハ こと 家の 書ハ政
南京の皿ハ こと 瓶の 内ハ水
竹新田ハ こと 毛見ハけけ

考 考 三 反 考 三 考 考

鷄ぬく冊上乃者往風の
 何とぞそのまゝ 巧布の葉袋
 横笛のうねるくく 菟乃垣
 鞋を踏く 飛石かたきり
 阿呆屋を初まはせし 呼ばる
 蟹六好の 兎角 ともろく
 何れ我のうらみお右に 持おく
 大目好く 投る 十一二節
 考 三 光 考 三 考 三

けり〜 木のしとぬく 序の
 とい隣を 持く 舞夜鳴
 一灰火のまゝ 何れいよる けり
 十のたのめ 何れ 何れ 何れ
 月と心おのめ 何れ 何れ 何れ
 あり〜 灰啼く 戸の二破り
 新垣の元と〜 愚の道
 いふ〜 何れ 何れ 何れ
 何 三 考 三 夕 考 三 何

け軍層くゑんそうのふしな星乃ほしのみと
幕まくらとやあそびのさし
石橋いしはしの笛ふえのうたはゆるし
燈あかりの片かたの影かげの痛いたハ
おぼろの産うぶのうたを
伯父おじ坊ぼくのうたを
いらやのうたを
とらやのうたを

あ~~~~~
阿南あなん梨りの背せのうたを
この水みづ麻あしのうたを
音ねのうたを
下したのうたを
とらやのうたを
大勢おほしげのうたを
仔細しじゆのうたを

田を打おし〜縹緲色
凡木の栲を老の河あふさ
丸つらと化をこおす いろ楓
盆か〜となく 蔭う 菟之弱
中げ〜心のち〜り〜 男よ
郭〜と〜ふい〜 一 暮人
階より〜半面〜 馬を行〜おり
あ〜と〜子〜 竹〜〜と〜や〜れ
三 全 考 反 三

補陀唐之岸〜の波のり〜
古跡と〜流の溝のちやま石
凡茶を齋せ〜ハ〜と〜と〜
今〜は〜さ〜け〜な〜花〜車〜お〜り〜い〜
義朝と〜情〜と〜ま〜と〜心〜は〜
草履〜と〜や〜促織の〜ま〜
と味線〜と〜序〜は〜か〜り〜ま〜の〜
観音橋乃 幸の 若月 智
反 色 線 反 考 三 色 反

雉をゆくまゝに屏風の細工は
 是れ輕所より日影をいづ
 打鍵は暗くといふとこしは
 傍に流すもいづとて
 かゝしをよきまゝ小使のむら
 てもつれをうへに念のまゝ
 手帳の心遣いもまゝに
 玳瑁の櫛ニ支ニ方し

光
 房
 光
 房
 光
 房
 光
 房

指法と若れぬ母の代り
 の流しに下判りふい
 らふうらにおせらるゝふいけは
 早稲のいらぬ人の好
 こゝ新小家の持主の村
 海ふりうらに口寄せは
 ちりくゝか戸中へは
 まの白ひの解りて

光
 房
 光
 房
 光
 房
 光
 房

後夜〜 羅の竹葉繁〜 三つあり
あゝ 雨の降る さいい 椽くふ
有馬少毛にけり 一也り 兵々 念を
あゝ 文あさの 鬼し 龍引
志賀寺に上人の 心は 能く
あゝ さいい 雨を 筋な 折り
おの せむ 雲の 月夜と ねら
風は 花散る 門と くらり
三 考 子 光 彦 三

金剛の 名を きたる 三つあり
ふと あり 三つ 雲の いろ
おま けり 花散る 三つあり
十 所 あり あり 石 櫃
この 山は 志く ねら 三つあり
人か ねら ねら 三つあり
三つ 家か 三つ あり 三つあり
三つ あり 三つ あり 三つあり
三 考 子 光 彦 三

新かく人しあふり江船部店
三
沈淫取意をけしき
子
橋板し木権の咲く朝の月
考
二か子ハ獲のまじりて
三
思いしけふいあけしうけし
洲
とくは此歌をねむり
考
今持て橋をせあけし
三
鳥は遊びしよれハ
父

鳥賊の甲掃しあふり
考
牛一の毛し
考
町し居し河をわたり
旧
出舞しよのけ
考
雲雲月し輝を
三
あはれぬそのよむ
洲
し名の習し小糸を
子
塩のきぬハ
考

とほくに京間あるを、
櫛田の川。ふくし首を付
いりぬくぬ。ふくれ、
あつし、
船政の目利ちり、
舟好い、
ふり又、
そ乃紙帳、
三
留
方
例
考
線
夕
之

かきけ、
船政、
法を、
櫛田、
草鞋、
ふくし、
三
留
方
例
考
線
夕
之

節季候は涼しくはなるを羅やら
 たしけしといふ服をきき
 朝食の落をききて川流せ
 袖のしほるからし一枚
 重なりしからしはるる片
 市の利はるる看しし初芽
 襦袢の落りおきたる袖のかせ
 洛利きりしとておるふり

例 色 臣 考 光 為 以

衣の袖はるるしとてきき
 さいははしとてはるるの中
 振袖の落りしはるる片
 福蘇寝のわしおきしふり
 くのしとてはるる片
 唐い袖はるるしとてきき
 方ゆしとてはるる片
 宿しとてはるる片

例 色 臣 考 光 為 以

新考考しすけハ新のう答りく
きハ考しすけハ新のう答りく
玄園ハ吹瀾く花の金屏風
弱弓のふく側ハ新のう答りく
水き日ハ新のう答りく
玉平ハ乃花くゆんちくを答
女子の舞をかんいハ新のう答りく
久ハ新のう答りく

三 考 三 考 三 考 三 考 三 考

鉄ハ新のう答りく
花の葉の中ハ新のう答りく
新ハ新のう答りく
久ハ新のう答りく
花の葉の中ハ新のう答りく
新ハ新のう答りく
久ハ新のう答りく
花の葉の中ハ新のう答りく
新ハ新のう答りく
久ハ新のう答りく

三 考 三 考 三 考 三 考 三 考

垣柵の中へ入りて冬瓜を抱き取り
 泥に掛りて赤世類ア初め
 加る能辨ののりやうとておろけ足飯
 鶴の目出しに馬馬の一枚
 とうとうとてとてとてとてとて
 下りては家乃かかるとも
 ぬあへは清きよふくともやも
 矢橋にいやふ比敵月ぬく
 田 房 三 苗 房 五 臣

さああ〜鏡をまき〜御幣〜持
 ころやと中々午の顔を見ろ
 名月の付〜と〜おの陰下
 葉のお能いかに〜と〜ん
 唐の〜と〜府と〜と〜と〜と〜と
 二見北浦の〜と〜難い事
 松栢の中〜と〜白〜と〜峰〜の〜花
 暖ふり〜と〜と〜と〜と〜と
 三 房 三 苗 房 五 臣

さき風のあやふちのきこえ大工小屋 文海
新のきこえはしごとくしを 考
ゆいゆい山家の客のちかきしを 録
銀の葉八のおもいしを 色
黄檗の葉ふ新し柳の葉を 色
鏡をおぼえり夕と秋のきこ 考
うけりし被るるはれはしを 与
おぼえり葉はえりきこふり 色

あやふちのきこえ細引せはしを 考
新のきこえはしをきこえ 色
あやふちのきこえはしをきこえ 与
柳の葉のきこえはしをきこえ 与
月影のきこえはしをきこえ 色
新のきこえはしをきこえ 与
あやふちのきこえはしをきこえ 考
魚のきこえはしをきこえ 色

行燈の池のほとりには茶屋
 出雲の湯のほとりには茶屋の上
 おうまの好む硯石のうらみ
 きりふんおの具足一飲
 花の香とありて昔の古屋敷
 じふふふふふふふふふふ
 子 湯 方 為 同 三

第五 蝶

蝶くや介入の途に一 舞
 山ハ若ふくおろし 雲より 梅易
 之月のとく月とくや 舟乃中 枝虫
 何そ舞をよむの 碎^ひとし 土考
 旅板をばわく 雲のよい 土考 舞
 土考のよい 土考のよい 土考 舞
 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞 舞

廣く〜〜ぬらぬら子の子
き〜〜き〜〜木・食の寺
笈か〜水のく〜らら〜
眠い〜〜〜鈍不眠の〜
双六のお〜き〜お〜
流義の〜〜〜み〜ぬらら
鉢桶を〜〜〜合は〜
茶屋の〜〜主の〜
子 寺 同 考 色 考 子

わ〜〜〜〜月の子
お〜〜〜〜
林の子を衣の〜
お〜〜〜〜
之向と玄橋の〜
お〜〜〜〜
事柄の〜〜〜
〜〜〜〜埃ゆい〜
子 考 返 考 色 考 子

二ツ三ツ張子此獅子の鬚飾り
影珠まわつてわき裾におゆ女
やんくくくは月の光にやまらされ
此の用意こそ島よりくくく
勢よくとさくく下さくく丸あくる
小骨ふわりあまう 磨 勤心
まらくくくは空くく内の星も能く
くくくくくくおもくくくく
子 留 考 子 考 子 考 子 考

東坡くくく付ね部くくく 硯 筆
くくくのはくくくくくくあり
くくくくく本の葉折ゆくくくのりさ
初ゆくくくくくくくくくく
けくくく怒もくくくくくくく
くくく硯くくくの洒をくくくく
くくくをくくくくくくくくく
指のほわりくくくくくくく
考 子 考 子 考 子 考 子 考

花をとりてしるしをいふはなを
ひよ〜草ののひうすし縁
夏波をく〜色をいふはつらひ
こゑをふり〜し〜し〜し〜し〜し
上上下下遊語の殿〜し〜し〜し〜し
今〜し〜し〜し〜し〜し〜し
月の夜といひ〜し〜し〜し〜し
あはれ〜し〜し〜し〜し〜し〜し

花をとりてしるしをいふはなを
鑄の湯〜し〜し〜し〜し〜し
以放〜し〜し〜し〜し〜し〜し
あ〜し〜し〜し〜し〜し〜し
い〜し〜し〜し〜し〜し〜し
魚り人ふり〜し〜し〜し〜し〜し
け〜し〜し〜し〜し〜し〜し
梓〜し〜し〜し〜し〜し〜し

考 的 考 考 考 考 考 考

考 考 考 考 考 考 考 考

書く事ハ八卦と續く 祝の也
 峰の葉師の冨帳の抄片 色
 くら月人くくくく 徳の夢
 沈淫川く 終はきく
 晴霞の地紙の上く ことあま
 奥の院ハ 幸い 及く
 花ハはやちらほくく 中は
 菊餘の重く いろくく 香
 光 洞 夕 劍 子 考

書く事ハ 序意くくく 浅いふ
 け 新田く 片く 家ふ
 ちくく 榎く 孫く 蝶のま
 細工く 法ハ 堂の こと
 裏所ハ 一 ぬく こと かの
 っ 字く くら 世に 牛の 馬く び
 落か 必 十 軍の 城く こと 日
 土 用 不く こと 海く 思ふ こと
 考 色 子 色 子 色

大勢々并じし法陀ハ瓜りて
心ハちぬ月をば月とりし
澄し琉球芋を煮たりし
このこの瓶の節をゆくり
幸公はこれより小くいせよ
え指ししも今もたつらぬ
何事ともらぬ葉し思ふおほき
より世ハ正何こまらぬ
考 孫 三 考 苗 色 例 考

菟菟のちをどあけの心
お強いきるも春をのきり
元この根よいとてし
葉の上りのちやうしく
貧乏ふふし知れをゆり
世代ふしの流ハ美し
光 彦 彦 彦 彦 彦 光

第六 董

つれづれとくまの夜もくまの夜も 心の境 一通

一 町の福話とくまの 楮 梅 苗

女に肩をくまの夜もくまの夜も 南 紅

状の返事とくまの夜もくまの夜も 螢 夕

おもしろい門のくまの夜もくまの夜も 赤 子

振るくまの夜もくまの夜も 化 光

夕月とくまの夜もくまの夜も 古 田

早稲のくまの夜もくまの夜も 池 田

上人の海を渡すくまの夜もくまの夜も 房

弾くくまの夜もくまの夜も 琴 籠 の 習 子

短檠の灯とくまの夜もくまの夜も 田

て屏風とくまの夜もくまの夜も 名 考

菜の花のくまの夜もくまの夜も 名 考

吹雪くまの夜もくまの夜も 名 考

青墓一ゆつ色派くくゆま川 考
牛より遊いさる一昔は夕 例
胃くくおとくおせい女一 三
二新の隙の石は居一今 考
傘を積す一い一あんと所 為
家一も一神女ををまら加ふ 同
月をを宿い念を十一寸鏡 玄
片くく物をこくくくくく 玄

旅之公まよや明りやし昔はる 三
極意と海子の熱の迷惑心 強
楊弓の の着すく霧乃の弓 房
櫛をくまくまか石塔 三
まの尻く脚一かをくわんこを 光
く度の日赤りのこくくく 同
鉢巻一きあの頭痛を志あお 三
七里は派一まゆ一はく 玄

夕家記の字活とくさる河 公室 有
絢盤ほあ〜う終〜川〜海 苗
又久保かいた〜振席よ月の陰 之
約 運〜と 肌 毫 一 枚 彦
志 妙〜と 夕暮のそ けく 山 島 彦
子と〜ふあ〜相 争〜と 紅
折 琴と入を〜と〜 枝 箱 彦
ぬ〜り 夕〜と〜と 申〜ふり 之

山 乃〜とちろ〜と 人 の 殿 彦
塔 の 善 法〜と 高 い 是 代 彦
左 盆〜と 葉 露 と 曇 々〜と いろ 彦
後 色 不 明〜と 祝 儀 彦 彦
生 垣 の 風 々 何 々〜と 小 崎〜と 彦
片 舟〜と 舟 上 美 匠 の 目 子 人 彦
只 月〜と あり〜と 春〜と 友 か 彦 彦
お 滅〜と ね 織 侍〜と び や〜と 彦 彦

馬崎より高野の坊の月了経て
羽こそを海に舟をたのむ
行半をおまへしと秋をいそ
いそとをりてお立るとの落
あつとをりてお立るとの落
種は海に舟をたのむ
あつとをりてお立るとの落
お枝とつとを海をたのむ
考 考 考 考 考

お中夜おるるに夜やぬの奥
木魚は守る禪宗と
軍吏は愛しとて中にお立
呉服の子代のもは是奇麗
官のく陸子とのせく夏の月
帆は舟やら操師はや
木のくくを帝と一言を
路は海に舟をたのむ
考 考 考 考 考

ぬの山のー ぬの山ー 夕いり
 龍をけきけいふぬ。返さかき
 浅道のゆきゆき 紫屋に
 箒のふりー 乃 孫
 川路ー 携へて 乃 孫
 化りけいー いふたー 乃 孫
 見折ー 所の葉ゆー 乃 孫
 筆の中へゆり 加茂山の奥
 夕 出 考 三 光 考

志保ー いのちの命守り
 病月の葉 乃 孫
 泰平の御代ー 乃 孫
 打撃ー 乃 孫
 引さめ 乃 孫
 ぬいー 乃 孫
 伯母ー 乃 孫
 ー 乃 孫
 夕 考 夕 考 夕 考 夕 考

川燈の光りくくし打片の光
水揚海にハキハキと女坊居
肌をいふ所あつたうらうら
庭乃縁を繋ぎし川茶也
一岸ののとうほろりものも乃と
おぼしめしあそびふもこぬき
夕

第七 畠打

畠うちや帰るに星の光に母坂
花見し一日おかしき心ぬ梅田
新道の噂酒子おし海あり少
白く中一肝のゆといふ氣や
畠守の百玉を佳女合点し
汐きしおかしき河口の
一魚

枝垂

清原とていはいやうか新有五
、とていやくくと果合は漸ハヤ化先
くもくもと新くくくく果乃竹
も合の家ノの所よりいよ
卵のまの垣志はくくく味みしれ
まゝいやくくと清のきりすれ
何れ相くくくくいほく持くくく
是半もやう岩はまはくくく
考
紅
四
旧
こ

狼の痕と見きり、水は金所
まゝのけまゝゝゝゝくはぬく、
鶏ハ志のくくくくく粉乃中
ゆめいやくくとやうふこく月
流の紅のけいゝゝゝゝゝゝゝゝ
那部も、流と見きり、水は金所
物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
茶入ひとらゝゝゝのゝゝゝゝ
考

世もあつた名もあつた所々所々
 牛もさきもけり格もけり
 小舟細い葉雲のみけひと居る風
 一人も海もあつた
 行燈のひともあつた
 嵐もあつた
 世もあつた
 志もあつた

月の影もあつた
 水もあつた
 舟もあつた
 舟もあつた
 舟もあつた
 舟もあつた
 舟もあつた
 舟もあつた
 舟もあつた

何事も皆くそよふに
 南風のこきりひよき
 名月の折りこころ小
 かりやすき船の一
 海をよまよふ地の
 六ふきそよふの
 遠慮より維摩の
 新證しふるま

夕
 秀
 こ
 当
 彦
 全
 五
 こ

えりそよふに
 蝦夷の子
 五月の
 昔の
 花の
 雲の

洞
 房
 こ
 色
 紅
 こ

勅命とききむつゝやるゝ利根こ
おのいもいぬのふつ降心は
扶箱めりききしとら施氣鬼棚
西の田の畔 月とわつてん
ちんくしんく目白のと海はくし
陰子明もいふとくわくわく
龍子けい子の居もやうとんて
膝脹しししし折るなり
考 考 考 考 考 考

ふきんしし施行の形をわく
ふ。おとふい城はくし
いさのふもあししはふし
松原はをわくし 息吹し
はくしをわくし今のわくし
陰子明もいふとくわくわく
棟上の切棟のしふ。わくし
まのしししししし
考 考 考 考 考 考

燈臺の池とふい〜かき物あり
土踏破きい知〜か〜
然方とさ〜定〜
蕭々として〜
七〜
おと〜
章秋天の肩の若事〜
こ〜
同考夕

お局〜
い〜
軒唐の〜
小〜
中〜
川〜
所〜
福活〜
夕
子
こ
夏
臨
方
芝
的

捲校ししりきり日かき積塔
 下流し軍履し交り上下
 小流と出りし口流りしふり
 町し田の所志摩の城下
 鯨母しし娘屋の男のきめしあはる
 好庵しし見ししきしししし
 かしきししあしし流ししきししあ
 善心持ししし門のせぬさよ
 考 考 考 考 考 考 考

さいしし流ししししししししし
 ぬししししししししししししし
 塚先しし各の徳をきししししし
 しししししししししししししし
 鎖をとししししししししししし
 裕ししししししししししししし
 兼吸とつしししししししししし
 切ししししししししししししし
 考 考 考 考 考 考 考

香色のやふらぬ顔目とさうしつり
 沖波の浦れ浪のさぬく
 奉公しつりつり流れ悉しつり
 世帯しつりつりつり 持込 子
 舞殿しつりつりつり 白母本手 考
 家の系図しつりつりつり 家 三

第九 紙巻

隣りつりつりつりつりつりつり
 夏しつりつりつりつりつりつり
 海しつりつりつりつりつりつり
 名しつりつりつりつりつりつり
 明かりつりつりつりつりつりつり
 山つりつりつりつりつりつりつり

東子
 梅苗
 梨隔
 一通
 杖垂
 古洞

東風吹すいかよ草の香の所あはれ
けり方隠れ 蕪々 ともねる
酒の山へ草々 景を何ふなり
か質のよれ 能登の町と
流茶 暖々 せき とも 貴子り
星 麻 紅い 温 休 ぬる あり
方丈の六 夏 花 山 あり あり
さるめ おも あり あり あり あり

何神々 あり あり あり あり あり
こふの 月 あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
一字 あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり
あり あり あり あり あり あり

山寺ハ持斎乃鼻の秋を成る
 全割ハ春ハ露命志のうを
 石ハほろ指うけ原を背たの川
 畠とくもくおくくの子
 汗とくい津橋の中は息を
 春ハ月とく秋とく秋とく秋とく
 秋とくもくもくもくもくもくもく

与 田 死 房 夕 田 笠

秋とくくもくもくもくもくもくもく
 指とくもくもくもくもくもくもく
 心ハ秋とく秋とく秋とく秋とく
 源紅の露ハ露ハ露ハ露ハ露ハ
 遠くハ秋とく秋とく秋とく秋とく
 小秋とくもくもくもくもくもくもく
 并大の月とくもくもくもくもくもく
 秋とくもくもくもくもくもくもく

与 笠 田 死 房 夕 田 笠

鬼の子はあまの娘の孫へ成り及
風の葉は——藤氏おれ
山坂のきしむる松舟こぼるる
河のゆきやうりしき葉川やうり
おれおれ——とわらう——
元録の比——とわらう——
堺の月——片路をく——
考

うき世のいさう——神々の元へ
蘇——の——徳——
こけの的矢——屋中月戴
角——とては——元服
か——い——と——あ——
こけのよ——家の唐さよ
藤引の馬の祈禱——ふたふた
葉は——い——あ——の——
内

一 包 六 條 板 へ 浪 二 兩 有
くまの月のおのり 崎まうやう
岸待し 約ま ー さうと 巨 人
古 海 かい や ぶり と ぶ 海 ー ー ぶ い
たうさ ー ー 功 毛 ー 佳 長 是 二 方 様
所 の 祿 意 香 の 盤 乃 白 片 ー
是 ー ー ー や 火 け ち け ー ー 石 燈 籠
山 一 部 頭 ー ー 在 一 行 ー ー 有 ー
笠 房 与 三 匹 印 金 有

こ 階 ー 敷 乃 香 の の ー ー ー 有 ー
魚 盆 の 鼻 を 風 の も し ー ー 有 ー
此 盆 一 池 ー ー け ー ー たり ー ー 有 ー
く ー ー ー ー ー 車 一 一 有 ー 有 ー
而 遊 心 一 一 海 子 昔 一 一 抱 一 一 有 ー 有 ー
桐 の 葉 一 一 一 有 一 一 秋 の 片 一 一 有 一 有 一
夕 月 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 有 一 有 一
舞 殿 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 有 一 有 一

こゝに踏むや旅におもひ
いゝ遊屋の曲岸
鎌の月とていふ所の町
師走の雪はむ
清七翁に又いふ所の飛鳥
いふ所のいふ所の
井戸堀のわらわの
河の伎乃いふ所のいふ所

子 乃 三 岳 乃 三 岳 乃 三 岳 乃 三 岳

こゝに踏むや旅におもひ
いゝ遊屋の曲岸
鎌の月とていふ所の町
師走の雪はむ
清七翁に又いふ所の飛鳥
いふ所のいふ所の
井戸堀のわらわの
河の伎乃いふ所のいふ所

子 乃 三 岳 乃 三 岳 乃 三 岳 乃 三 岳

何んぞ〜箱根を越〜郭を
轉轉〜切布於本城の臺
首の月おらむ〜なほや
何れ〜麻の急の如きり
能く〜彼岸と云〜般多坂
〜下け〜権の執あ〜つた
大〜決的長官乃〜屯〜成多
こ〜れ〜鋼〜一〜及
房 三 玄 房 三 玄 房 三 玄

暖るを〜〜時を〜路も全
諸神を〜女〜名
お〜た〜持佛の〜建
福平の〜法〜
お習の〜油〜
針屋の〜
物持を〜
巻〜
房 三 玄 房 三 玄 房 三 玄 房 三 玄 房 三 玄

七日やうし 報日ころは 月しりし
むちといたし 取のまのあり
おとあへおとせし 二条の田原
葉のゆらゆら 何とゆらゆら
沿路のいさよ しゃんしゃん
家本をたぐぬ 目撃者信
降くくく漏れ 雲をいれ
見付の番の 橋をいれ
与 子 三 為 乃 色 生 居

時とやらら くらに 屋を 紅屋
木村長門守 志 節
引心いし 月夜の花 三十里
おとあへおとせし 二条の田原
葉のゆらゆら 何とゆらゆら
沿路のいさよ しゃんしゃん
家本をたぐぬ 目撃者信
降くくく漏れ 雲をいれ
見付の番の 橋をいれ
与 子 三 為 乃 色 生 居

那をく深の上へ一葉をひきく
魚望一人のまじりかきしり
嘆きし魚下の影をおひく
日和あけぬる雛子の一歩
清きまじりぬるものお田を
積まきりぬるものお田を
之ふぬ火おひく、
いふぬ火おひく、
いふぬ火おひく、

書強と琵琶のまじりかきしり
なまきりぬるものお田を
あけぬる雛子の一歩
清きまじりぬるものお田を
積まきりぬるものお田を
之ふぬ火おひく、
いふぬ火おひく、
いふぬ火おひく、
下へおひぬる奉書の文
う川へおひぬる奉書の文
小賃くともぬる奉書の文

とくはゆりて壁乃生しや
障りの多い長谷の正仁堂
剃刀は傳りてありて
國へのはるもなきをよふ
思おほへのね。一本塚の裏
兵法やたゞ軍書海鏡
義朝ハ床本の上へ
凌青々咲く

考
目
張
出
包
海
こ

竹の障とふいふりて啼く
敵城はらふは片月乃
是れとにそりて
又ケルケルハ棒一
三説の口ハ深恩の藍の
本はひら布を容を
路次の戸をまきし
蛇と穴の世間

考
子
取
こ
考
色
あ
こ

唯崎く小倉堤を歩ひしとき
海に波の音を聞きしとき
舟を漕ぐこの比ふも
燈の光をみしとき
四十の月夜かきぬ
かゝる月夜かきぬ
入れり時をいひ
凡日の月と葉の

考
考
考
考
考
考
考
考

山を登りしとき
狼の吠えしとき
板の音を聞きしとき
海に波の音を聞きしとき
お島の宮殿のせむし
朝の光をみしとき
馬の片肌をみしとき
ふれしとき

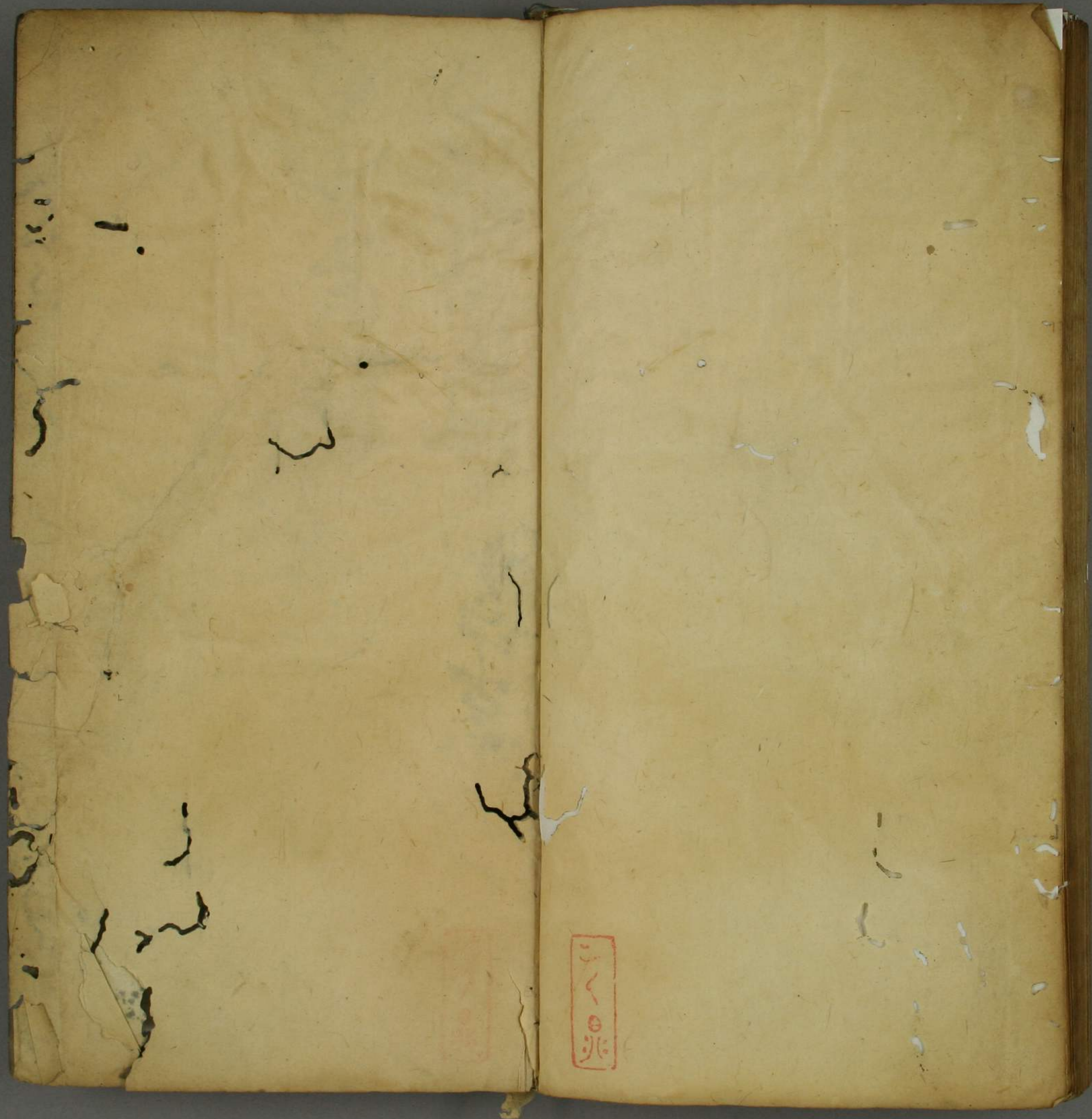
考
考
考
考
考
考
考
考

お目元のほぬお寺そ目若く
伽藍の小刻く小刀を磨く
或時ハキセ不肖くく笛の鶴
おのちよいい兜のよま
世くうよ舞馬の山のよ
橋本是く茶漬くハ不好
一本の陰持くく乃凡
池に不まりのえゆく作初山
考 迄 こ 同 光 考

ほろくのやふ孫帽子名流く
毒葉若くくをたの
名月く大物流くく片や
暇を志おのハせおい言笑
秋をく頭痛く肺をく
ふ字新くく余余余の笠
何さく片がくく和燈くく
名主く坊の所ぬく
考 考 考 考 考 考 考 考

十_六五_一 著れあめをとんきかり
名所の川_一 細代_一 川の
水_一 箭_一 くり_一 物_一 の_一 秋_一 の_一 夜_一
竹_一 下_一 流_一 とい_一 せ_一 河_一 の_一 水_一
一_一 片_一 も_一 船_一 と_一 入_一 る_一 け_一 の_一 梳_一
大_一 津_一 筋_一 流_一 ち_一 岸_一 以_一 り_一 ち_一
唯_一 子_一 一_一 列_一 傳_一 の_一 片_一 々_一 節_一 修_一 せ_一
早_一 苗_一 の_一 流_一 の_一 舟_一 舟_一 舟_一 舟_一
例_一 多_一 三_一 考_一 口_一 夕_一 考_一 三_一

白河の巽と御_一 頭_一 殿_一 々_一 流_一
何_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一
今_一 合_一 の_一 規_一 子_一 匠_一 々_一 々_一 々_一 々_一
朝_一 の_一 重_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一
正_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一
長_一 の_一 忍_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一 々_一
年_一 同_一 死_一 芝_一 同_一 房_一



つく
光

